夏目漱石氏を論ず

生田長江

夏目漱石氏を論ず

三十九年五月号の「文章世界」を見ると、正宗白鳥氏が「大学派の文章家」と云う見出しで、

夏目漱石氏は故正岡子規氏の親友で、以前から俳句には斬新(ざんしん)奇抜の作もあったが、散文の製作は甚(はなは)だ少く、柳村氏などとは異り、殆んど読書社会の注意を惹かなかった。然(しか)るに昨年一月「ホトトギス」誌上に「吾輩は猫である」の戯文を掲げてより、俄(にわ)かに評判高くなり、自分も大(おおい)に気乗りがしたと見え、頻りに其(その)続篇

を出し、又小説にまで筆を染るに至った。今では大学派文士第一の人気者たるのみならず、文壇全体より云うも、五指の中に数えられる程の流行児となった。云々と書いている。批評するものは白鳥氏、批評せられるものは漱石氏、而(しか)して僅(わず)かに五六年以前のことである。面白いではないか。

四十三年七月号の「新潮」を見ると、「夏目漱石論」の中に戸川秋骨氏は、

何(いず)れかと云えば予は漱石党である。昔から彼の技倆(ぎりょう)に服している。予は何故(なにゆえ)彼に早く地位が出来なかったか

を怪んだ一人である。明治二十六七年頃の哲学雑誌に発表された論文を見たことがあるが、論旨極めて明晰で、いかにも頭のはっきりした人だと思った。それは、「英吉利文人の自然に対する観念」と云うもので、その時初めて漱石氏の文を知り、大変偉い人と思った。それは論文であるが、彼の倫敦（ロンドン）通信に依って、その創作的の才にも服した。早く既に今日の地位にならねばならぬ筈の人が、「猫」を発表するまで遅れていたのだ。

と言っている。成程（なるほど）、「英吉利文人の自然に対する観念」

や、「倫敦消息」は、学者としての漱石氏の、作家としての漱石氏の、凡庸ならざる天分と修養とを、十分に証拠立てているに違いない。けれども氏は、其天分と修養とを使用して、世間一般から認められるに至るべく、余りに無精者であったと思う。

国木田独歩氏の如く、夙(はや)くから認めらるべきものを書きながら、一向に認められないでいた人もある。

田山花袋氏の如く、長いこと、認められるに足るほどのものを書き得なかった人もある。

漱石氏の如く、久しい間、認められるほどの分量を書

かないでいた人もある。

漱石氏をして、認められるほどの分量を書かしむるに至ったものは、「吾輩は猫である」の反響であった。その「猫」を書かしめたものは高浜虚子氏である。更に遡(さかのぼ)っては正岡子規氏であろう。「猫」の中巻の序には、予が倫敦に居るとき亡友子規の病を慰める為め、当時彼地の模様をかいて、遥々(はるばる)と二三回長い消息をした。無聊(ぶりょう)に苦んでいた子規は、予の書翰(しょかん)を見て大いに面白かったと見えて、多忙の所を気の毒だが、もう一度、何か書いて呉れまいかとの依頼をよこした。云々

とかいてある。更に亦、

子規がいきていたら、猫を読んで何と言うか知らぬ。或は倫敦消息は読みたいが、「猫」は御免だと逃げるかも分らない。然し「猫」は予を有名にした第一の作物である。有名になった事が左程の自慢にはならぬが、「墨汁一滴」のうちで暗に予を激励した故人に対しては、此の作を地下に寄するのが或は恰好(かっこう)かも知れぬ。季子は剣を墓にかけて、故人の意に酬(むく)いたと云うから、予も亦「猫」を碣頭(けっとう)に献じて、往日の気の毒を、五年後の今日晴らそうと思う。云々

とかいてある。

氏は由来引込思案の方で、人が来て引張り出さないならば、何処(どこ)へも出て行かない人らしい。其代り引張り出せば、随分と出て行かないこともないようだ。

氏自らの言うところに依ると、学生時代に工科から文科へ転じたのも、友人に勧められたからである。大学を出て松山の中学校へ行ったのも、転じて熊本の高等学校へ行ったのも、英国へ留学して、帰朝後東京の学校へ勤めるようになったのも、朝日新聞社へ這入(はい)ったのも、むこうからどうだと言われ、是非にと言われたからである。

氏は曾(か)つてきかれもしない自分の希望を、自分から申出たことがない。よそから持込んで来るまでは、如何なる計画をも持出したことがない。其態度はあくまでもパッシイヴのように見受けられる。

パッシイヴと云えば、何事も他人の言うなりになっているように聞えるが、氏はなかなか他人の言うなりになっている人でない。寧(むし)ろ、他人は他人、自分は自分と云うような、思切った態度に於て、ともすればつむじ曲りと云われるような態度に於て、其真骨頂を見せている。

氏はかの陶庵侯(とうあんこう)の文士招待にも謝して出なかった。文

学博士の学位をも辞退した。其理由は氏自らの公言せられているより外に、別にあるかも分らない。兎(と)に角(かく)多数の人々からは、痛快なる行動として承認されている。私共も其痛快に、格別の犠牲が払われていないのを慊(あきた)らないと云う丈(だ)けで、独立自尊の氏の性格は、ああした些細(ささい)な事件にさえも、遺憾なく現われているかと思う。

独立自尊と云う日本語を、Stolz と云う独逸(ドイツ)語にかえて見るとき、漱石氏の横顔が、フリイドリッヒ・ニイチェのそれに、少からず似通っているのを想起して、一種味わいのある、軽いユウモアを覚える。

氏の態度をパッシイヴであると云うよりも、アクティイヴに対するリアクティイヴと云う方が、より多く当っているかも知れぬ。兎もあれ、万事に付けてアクティイヴの人であるとは云われない。

更に畳みかけて云えば、ポシティイヴの方面よりも、寧ろネガティイヴの方面に於て、個性を発揮している人ではなかろうか。

一体に、「漱石氏は如何なる事をする人であるか」の問題よりも、「漱石氏は如何なる事をしない人であるか」

の問題が、遥かに私共の興味を惹く。

氏は常に、面目を施すと云うことよりも、体面を傷けないと云うことに重きを置く。

氏には賞讃せられようとする心より、非難せられまいとする心が強い。虚栄心は少いけれども、馬鹿にされると云うことが、恐ろしく嫌いな人らしい。

氏は人から侵されることを厭(いと)う代りには、自らも人を侵そうとせぬ。

鏡花氏の小説に鏡花式の婦人が出て来る如く、漱石氏の小説には、漱石式の主人公が屢々(しばしば)出て来る。その主人

公等と同様に上品なところのある、同様に潔癖なところのある漱石氏も、流石(さすが)にまだ彼等ほど、仙骨を帯びたる人ではなかろう。

氏は固(もと)より、通常人に比較して、利慾に淡泊なる人であろう。少くとも貪(むさぼ)るところのない人である。けれども、貪るところがないと云うのは、必ずしも物外に超然たるの謂(いい)でない。

兎もあれ氏は、世間で想像されているよりも、ずっと野心のない人である。而して野心家がきらいのようである。だから高山樗牛氏なぞのように、露骨にアムビシアス

なる性格は、他の方面に余程の好い所があったにしても、漱石氏の気に入ることはむつかしかろうと思う。

親友の子規氏すら、氏に比べると大にアクティイヴである上に、大にポシティイヴで、とりわけアムビシアスであったのは、氏にとって寧ろ、快くなかったことに違いない。少くとも物足りなかったことに違いない。

「切抜帖より」の中に、「子規の画」を論じた文章がある。其中に、

東菊（あずまぎく）によって代表された子規の画は、拙くて且つ真面目である。

とも書かれている。

馬鹿律義なものに、厭味も利いた風もあり得ない。其処に重厚な好所があるとすれば、子規の画は正に働きのない愚直者の旨さである。けれども一線一劃の瞬間作用で、優に始末をつけられべき特長を、咄嗟に弁ずる手際がない為めに、已むを得ず省略の捷径を棄てて、几帳面な塗抹主義を根気に実行したとすれば、拙の一字はどうしても免れ難い。

子規は人間として、又文学者として、最も「拙」の欠乏した男であった。永年彼と交際をした何の月にも、

何の日にも、予は未だ曾つて彼の拙を笑い得るの機会を捉え得た例がない。又彼の拙に惚込(ほれこん)だ瞬間の場合さえ有(も)たなかった。彼の歿後殆んど十年になろうとする今日、彼のわざわざ予の為めに画いた一輪の東菊の中に、確に此(この)一拙字を認めることの出来たのは、其結果が予をして失笑せしむると、感服せしむるとに論なく、予に取っては多大の興味がある。ただ画が如何にも淋しい。出来得るならば、子規に此拙な所をもう少し雄大に発揮させて、淋しさの償(つぐない)としたかった。

とも書かれている。才人漱石氏の目から見て、最も「拙」

の欠乏した男と云えば、ほかにはどうしても考えようがない。あまりに覇気があり過ぎて、多少の厭味になると云いような意味ではないか。

厭味と云えば氏は口癖にいやみのあるなしを言い、邪気のあるなしを言う。而(しか)して、単にいやみがないとか、邪気がないとか云う丈けで、つまらない人物や、下らない作品なぞをも高く買う。偉大なるものよりも、先(ま)ず渾然たるものを求める。総じて評価の標準が消極的に偏すると云う非難を免れぬ。

大学を辞して、朝日新聞へ這入った時の入社の辞にも、

大学で講義をするときは、いつでも犬が吠えて不愉快であった。予の講義のまずかったのも半分は此の犬の為めである。学力が足らなかったからだ抔（など）とは決して思わない。学生には御気の毒であるが、全く犬の所為（せい）だから、不平は其方へ持って行って頂きたい。

の一節がある。其犬がどんな犬であったかは分らない。兎に角犬がきらいと見える。

氏は単に、犬の如く吠えつかないと云う丈けでも、噛みつかない云う丈けでも、猫を愛する人だと思う。

漱石氏は極端に走ることを好まない。中庸を得るのを眼目とする。されば鼻息の荒そうな他人の意見に対しては、容易に合槌(あいづち)を打つことをせぬ。或る時は、そうかしらと軽くそらしてしまう。或る時は、そうでもあるまいと横鎗(よこやり)を入れて見る。また或る時は、そんなことがあるものかと突き飛ばす。斯(こ)うした行き方は、必ずしも負け嫌いな性分に基づくものでない。一には These に対する Antithese を持出して、中正なる Synthese を作ろうとする、一種の Hegelianer であるからだ。

しかしながら氏は、決して綜合に急ぐ人でない。二の

要素が十分に融合し、調和し、渾然たるものになるまでは、自分の意見を立てようとせぬ。かつて半熟の説、半可の論を吐いたことがない。

アクティイヴよりもリアクティイヴに行動する漱石氏が、ポシティイヴなる方面よりもネガティイヴなる方面に個性を発揮する漱石氏が、極端を避けて中庸に就こうとする漱石氏が、もともと情意的の人であるよりも、智的の人であると云うのは、怪むに足らないことだろう。

固より氏の情意は、通常人に比較して貧弱なるもので

はない。

氏は屢々自分自身を、思遣(おもいや)りのない人間であると言うけれど、氏に接近して見た人々は、全然其反対の人であることを知っている。氏は曾つて、

私は外を歩いているとき、乞食を見ると不愉快でならぬ。一種の苦痛を感ずる。

と言われたが、私共はそれを聞いて、

乞食は除去せざるべからず。与うるも心を悩まし、与えざるも心を悩ませばなり。（"Morgenröthe" より）と云うような意味合で、並びに又、

上品なる人の心苦しく感ずるは、他人の自らに対して負うところあるを知るにあり。下品なる人の心苦しく感ずるは、自らが他人に対して負うところあるを思うにあり。（"Menschliches Allzumenschliches"より）

と云うような意味合で、非常にノオブルなる、そうしてディリケエトなる氏の性格を思った。氏が人に面と向って、気の毒だとか可哀想だとか言うにはばかるは、一面斯様（かよう）にノオブルなる、ディリケエトなる其性格に原因している。冷（ひやや）かなるが為めでない。

氏は又、薄志弱行の人でない。少くとも其感情の温か

に濃(こまや)かなると釣合の取れる位には、粘(ねばり)強い意志の力を有っている。

ここに氏を智的の人であると云うのは、氏自身の生活に於て、理解や分別の旺盛なる働きが、感触や欲求のつつましやかなる働きを凌駕(りょうが)していると云う意味だ。情意の天分が少いと云うよりも、智的の天分が多いと云うのだ。

漱石氏の教養は改めて説くまでもないことだ。

申分なき情意がゼントゥルマンを作るとき、非凡なる智力は学者を作る。ゼントゥルマンとしての漱石氏は、

後段に至って再び説くかも知れぬ。

学者としての漱石氏こそ、ずっと以前から認められるべくして、認められないでいた人だ。近頃になって、思出したように博士会が推薦したなぞは、聊(いささ)か滑稽の感がある。私共は、氏がそれを辞退するとき、「何時(いつ)私は博士号を値するほどの学者になったか」と、反問しなかったのを遺憾に思う。

「文学論」や、「文学評論」や、「文芸の哲学的基礎」や、「創作家の態度」の如き、未だ氏の学殖と学才とを傾倒し尽したものでもあるまいが、尚(な)お且つそんじょそ

こらの博士連中に、たやすく見出されないほどの、頭脳の明晰と、緻密と、独創とを証拠立てている。あの小説を読んだ丈けでも、欧羅巴（ヨーロッパ）のいずれの文豪にも劣らないほどの、すばらしい学問のあるのが分る。

偖（さ）て其すばらしい学問に対して、閲歴はどうかと云うに、経験はどうかと云うに、だいぶ遜色があるかと思う。

文学者の上に所謂経験が、単に駈落（かけおち）をしたとか、放蕩（ほうとう）したとか云うような、極めて狭いものに解せられていたこともある。そうした意味合の経験があるかないかは、

問題にする丈け野暮である。漱石氏がそうした方面に材料を取ることの希(まれ)なのは、少しも怪むに足らないことだ。

所謂経験が、「実生活」にふれるとかふれないとかの詮議と共に、何よりも先ず金に困ると云うような、妙に偏(かたよ)ったものに解せられていたこともある。今尚お解せられていないとも限らない。そうした意味合の経験がどれ丈けあろうか。かなり大切な、さればとてあまり有難くもない此種の経験がどれ丈あろうか。兎に角、漱石氏の小説には、貧乏人らしい貧乏人が出て来ない。二進(につち)も三進(さつち)も行かないような、食わないでいるよりも苦しいほ

どの、切迫(せっぱ)つまった生活が書かれて居らぬ。

「野分」の中なぞに、真面目な生活難があると思うのは、余りに幸福過ぎる人である。障子紙の破れた、雨漏りのする家さえ見れば、赤貧洗うが如しとはこれだなと、早合点してしまうような人である。あれ位の清貧に甘んずる白井道也氏を偉いと云うならば、昨日今日襟垢(えりあか)のついた綿入に、同様の浴衣(ゆかた)を重ね着しながら、金にもならぬ芸術論を上下している手合は、悉(ことごと)く皆偉い人でなければならぬ。

駈落をしたり、放蕩をしたりするようなことでないま

でも、金に困ると云うようなことでないまでも、尚お且つ文学者の経験として必要なのは、波瀾の多い、曲折に富んだ生活であるように考えられている。

ところで波瀾の多い、曲折に富んだ生活は、求めざるに与えられる場合もあれば、求むるに与えられざる場合もある。与えられると与えられないとは運命で、また如何(いかん)ともすることが出来ぬ。求めると求めないとは性格である。求める者に名(なづ)けてしばらく浪漫主義者と云おう。

浪漫主義者は芸術にそそのかされたる空想を、さながら人生に実現しようとする。自然主義者が人生のあらゆ

る事象をそのままに芸術視しようとすると、鮮(あざや)かなる対照をなすものだ。

漱石氏一味の「低徊趣味」は、人生の厳かなる大事をことさらに避け、何のあぶなげもなき部分に於て、極めて小規模に、極めて控目に芸術と人生とを混同して楽もうとする趣意らしい。

氏の如きは、好奇心の恐しさを知らない人である。やり足らなかったと云う、はがゆい憾(うらみ)を遺(のこ)しても、やり過ごしたと云う痛ましい悔(くい)を遂に覚えることのない人である。寧ろ安全なる自然主義者であって、危険なる浪漫

主義者でない。

浪漫的ならざる漱石氏の性格は、所謂浪漫的の生活を、ことさらに求めようとしなかった。運命も亦多くを氏に与えないでいたかと思う。

けれども直に、それ故漱石氏が経験に乏しい人であるとは決して言わぬ。

なぜと云って、所謂浪漫的の賑(にぎ)やかなる生活は、経験のはでなる輪廓に過ぎない。はでなる輪廓の中には、豊富なる含蓄もあり得ることであり、貧弱なる含蓄もあり得ることだ。

所謂浪漫的ならざる淋しき生活は、経験のじみなる輪廓に過ぎない。じみなる輪廓の中には、貧弱なる含蓄もあり得ることであり、豊富なる含蓄もあり得ることだ。

貧窮のあまりに金貸婆（かねかしばばあ）を殺して其金を捲上げたと云う、それ丈けの輪廓に対しては、普通の三面記事にでもなるより以上に、何等の含蓄を加えない経験もあるだろう。同時にまた、ドストイェウスキイの「罪と罰」なぞにかかれるような、非常に含蓄の多い経験もあるだろう。戦争に行って、人が殺したり殺されたりするのを見たと云う、それ丈けの輪廓に対しては、僅かにかの桜井中尉

とか云う人の、「肉弾」なぞにでもなるより以上に、何等の含蓄を加えない経験もあるだろう。同時にまた、アンドレエエフの「血笑記」なぞに題材となるような、非常に含蓄の多い経験もあるだろう。

しからば、輪廓を同じうする経験の含蓄を、貧弱ならしめないで豊富ならしめるのは何であろうか。第一には主観の老熟である。老熟の理智である。第二には主観のわかわかしさである。多感なるわかわかしさである。

老熟の理智は大抵の人が認めている如く、所謂内省の作用をなして、解剖し分析し、単純なるものを複雑なる

ものにする。

多感なるわかわかしさは、目に見たものを、見た丈けに止めて置かず、耳に聞いたものを、聞いた丈けに止めて置かず、頭の片隅に考えたものを、考えた丈けに止めて置かぬ。悉くそれを浪高き心臓に送って、今生命全人格の動揺にしなければ承知せぬ。かりそめなる刺戟にもゆゆしき響を反さなければ承知せぬ。浅薄なるものを深刻なるものにする。

乃ち、含蓄の複雑にして深刻なる経験を獲んが為めには、老熟の理智と、多感なるわかわかしさとを必要と

する。多感なるわかわかしさを以て焼き、老熟の理智を以て鍛えなければならぬ。焼かなければ鍛えることが出来ず、鍛えなければ人の肺腑を突くような、刃物を作ることが出来ないからである。

漱石氏の場合、理智に間然するところのないのは云うまでもない。わかわかしさは如何であろうか。

ゲエテはかつて、

長生はしたい、年は取りたくない。

と言ったそうな。実際に於ても、長生はしたが、年は取らなかった人である。常にわかわかしさを尚（たつと）んでいた

のは、わかわかしさを有(も)っていたからだろう。

島崎藤村氏も、「新片町より」の序に於て、文学を味(あじわ)い知ると云う上から言っても、もとより経験に耳を傾ける価値はある。ただそれを打砕く丈けの若さがなくてはならぬ。

と言った。兎もすれば、老い込み易き日本の文学者として、氏の如きは希(まれ)らしく、わかわかしさを失わないでいる人だ。そうして、そのわかわかしさを稚気と名けても、大部分がセンチメンタリズムから成立っていると云っても構わない。兎に角それが、独歩氏花袋氏なぞの作品に

於けるが如く、氏の作品に於ても亦、非常に大切なる、価値ある一要素であることは争われぬ。

今漱石氏には、独歩氏や、花袋氏や、藤村氏なぞに折々見るような、甘いセンチメンタリズムがない丈けであろうか。油断をすれば半可を伴うような、ああした稚気がない丈けであろうか。

あまりに早くわかわかしさをなくする人もあれば、はじめからして年寄りじみた人もある。

漱石氏の如きは、あまりに早くわかわかしさをなくしたと云うよりも、はじめからして年寄りじみた人ではな

かったろうか。作品の上にも議論の上にも、多感なるわかわかしさが甚だ足りない。

わかわかしさの火がないならば、老熟の鉄槌(てっつい)も其用をなさぬ。経験の含蓄をして複雑深刻ならしめることが出来なくなって来る。

斯(こ)う見て来ると、竟(つい)に、漱石氏を以て経験に乏しき人となすことの、理由なきにあらざるを思う。特に其すばらしき学問に対しては、非常に遜色のある経験であるとも思う。

すばらしき学問に対して非常に遜色のある経験は、芸

術家としての漱石氏の第一の弱味でなければならぬ。けれども其為めに、学問其物と芸術とを、互に相容れざるもののように早呑込をするのはよくないことだ。

とりわけ、氏等の作品に、抽象的の議論が多いと云うことを、さながら非難すべき事のように考えるのは間違いである。

述作の抽象的なると、具体的なるとに依って、批評と創作とを差別しようとする人がある。

若しも抽象的に書かれたものが批評であって、漱石氏等の作品が抽象的に書かれているとするならば、批評と

して見たらばいいわけだ。抽象的に書かれた部分が多いとするならば、それ丈け批評的なる述作として見たらば済むことだ。

抽象的に書かるべきものが、抽象的に書かれたと云う丈けならば、具体的に書かるべきものが具体的に書かれたと同様に、何の差支もなき事ではないか。

次ぎには、漱石氏等の述作に、分析的の説明が多いと云うことを、さながら非難すべき事柄のように考えるのも間違いである。

述作の分析的なると、綜合的なるとに依って、批評と

創作とを差別しようとする人がある。

若しも分析的に書かれたものが批評であって、漱石氏等の作品が分析的に書かれているとするならば、批評として見たらばいいわけだ。分析的に書かれた部分が多いとするならば、それ丈け批評的なる述作として見たらば済むことだ。

分析的に書かるべきものが、分析的に書かれたと云う丈けならば、綜合的に書かるべきものが綜合的に書かれたと同様に、何の差支もなき事ではないか。

創作と批評とは、それぞれの人に依り、それぞれの理

由によって、それぞれの差別を立てられる。

私は近頃、実生活から直接の題材を獲た述作であるか、間接に題材を獲た述作であるかに従って、創作と批評とに一応の差別を立てようと思っている。

所謂創作は、実生活の中から材料を取って、実生活に足らざるところを補い、所謂批評は創作の上に題目を選んで、創作に欠けたる所を充たそうとする。

表現すると云えば、批評も亦創作と同じく表現する。評価すると云えば、創作も亦批評と同じく評価する。

創作に実生活の評価があるごとく、批評に創作の表現

がある。

多くの場合に於て、実生活の中から材料を取る述作が、抽象的の議論よりも、具体的の描写に傾き、分析的の理智に須つよりも、綜合的の情意に須つものであることは、私も亦十分に認める。又多くの場合に於て、創作の上に題目を選ぶ述作が、具体的の描写よりも、抽象的の議論に傾き、綜合的の情意に須つよりも、分析的の理智に須つものであることは、私も亦十分に認める。

けれども、抽象的だとか具体的だとか云うよりも、分析的だとか、綜合的だとか云うよりも、実生活から直接

に題材を獲たか、間接に題材を獲たかと云う方が、或る場合に於てはずっと面白い差別でもあり、便宜な差別でもあろうと思う。

ところで、斯うした差別の立てかたからすると、漱石氏の小説なるものは、森鷗外氏等のそれとおなじく、大抵の場合、創作と批評とが一になったもののように考えられる。

乃ち氏等の小説には、創作と批評とがないまぜになっているようだ。執筆の際、実生活の各断片を順次に表現して行こうとする、所謂創作的の心と並びに、その表現

されて行くものを片端から評価して行こうとする、所謂批評的の心とが、代る代る働いているようだ。

出来上ったものに就いて云っても、土台は立派な創作であって、其上に念入りの批評を戴いている。自分の書いたものは自分で批評すると云うような、他人の批評には委せられないと云うような風さえ見える。

漱石氏の小説に於て、そうした傾向の最も著しい例は、「虞美人草」の七五頁から七七頁へかけて、

斬った張ったの境に甲野さんを置いて、始めて甲野さんの性格を描き出すのは野暮な小説である。廿世紀に

斬った張ったが無暗に出て来るものではない。

と云うような批評がある。私共の所謂批評がある。同じく一七七頁には、

此作者は趣きなき会話を嫌う。猜疑(さいぎ)不和の暗き世界に、一点の精彩を着せざる毒舌は、美しき筆に、心地よき春を紙に流す詩人の風流でない。閑花素琴の春を司(つかさ)どる人の歌めく天が下に住まずして、半滴の気韻だに帯びざる野卑の言語を臚列(ろれつ)するとき、豪端(ごうたん)に泥を含んで双手に筆を運(めぐ)らし難き心地がする宇治の茶、薩摩の急須と、佐久良(さくら)の切炭を描くは瞬時の閑を盗んで、一

弾指頭の脱離の安慰を読者に与うるの方便である。ただし地球は昔より廻転する。明暗は昼夜を捨てぬ。嬉しからぬ親子の半面を最も簡単に叙するは此作者の切なき義務である。茶を品し、炭を写したる筆は再び二人の対話に戻らねばならぬ。二人の対話は少くとも前段より趣がなくてはならぬ。

と云うような批評がある。同じく二三五頁には、

謎の女の云う事は次第に湿気を帯びて来る。世に疲れたる筆は此湿気を嫌う。辛うじて謎の女の謎をここまで叙し来った時、筆は一歩も前へ進むことが厭だと云

う。日を作り夜を作り、海と陸と凡てを作りたる神は、七日目に至って休めと云った。謎の女を書きこなしたる筆は、日のあたる別世界に入って此湿気を払わなければならぬ。

と云うような批評がある。「坑夫」の一六頁に於て、

「遣るなら話すが、遣るだろうね、お前さん。話した後で厭だなんて云われちゃ困るが。屹度遣るだろうね。」

どてらは無暗に念を押す。自分はそこで、

「遣る気です。」

と答えた。然し此答は前のように自然天然には出なかった。云わばいきみ出した答である。大抵の事なら遣って退けるが、万一の場合は逃げを張る気と見えた。だから遣りますと云わずに、遣る気ですと云ったんだろう。

までの創作に対しては、直ぐに続けて、

――こう自分の事を人の事のように書くのは何となく変だが、元来人間は締りのないものだから、はっきりした事はいくら自分の身の上だって、斯うだとは云い切れない。況して過去の事になると、自分も人も区別

はありやしない。凡てがだろうと変化して仕舞う。無責任だと云われるかも知れないが、本当だから仕方がない。これからさきも危っかしい所はいつでも此の式で行く積りだ。

の批評がかいてある。最後に同じく一四二頁を出して見るがよい。

考えると妙なものだ。一膳めし屋から突然飛出した赤(あか)毛布(ゲット)と夕方山から降って来た小僧と落合って、夏の夜を後になり先になって、崩れそうな藁屋根(わらやね)の下で一所に寝た翌日は、雪の中を半日かかって、目指す飯場へ

漸く着いたと思うと、赤毛布も小僧もふいと消えてなくなっちまう。

のあたりが創作から批評に渡る橋梁になって、それを渡れば遂に、

是では小説にならない。然し世の中には纏(まと)まりそうで纏まらない、云わば出来損いの小説めいた事が大分ある。長い年月を隔てて振返って見ると、却って此だらしなく尾を蒼穹の奥に隠して仕舞った経歴の方が、興味の多いように思われる。振返って思出すほどの過去は、みんな夢で、その夢らしい所に追懐の趣があるん

だから、過去の事実それ自身に何処かぼんやりした、曖昧な点がないと此夢幻の趣を助けることが出来ない。従って十分に発展して来て因果の予期を満足させる事柄よりも、此赤毛布流に、頭も尻も秘密の中に流込んで只(ただ)途中丈けが眼の前に浮んで来る一夜半日の画の方が面白い。小説になりそうで、丸で小説にならないところが、世間臭くなくって好い心持だ。只(た)だに赤毛布ばかりじゃない。小僧もそうである。長蔵さんもそうである。松原の茶店の神さんもそうである。もっと大きく云えば此一篇の「坑夫」そのものが矢張りそ

うである。纏りのつかない事実を事実の儘(まま)に記す丈けである。小説のように拵えたものじゃないから、小説のように面白くはない。其代り小説よりも神秘的である。凡て運命が脚色した自然の事実は、人間の構想で作り上げた小説よりも無法則である。だから神秘である。

のような、純然たる批評になっている。此等の実例が何ら蚤取眼(のみとりまなこ)で捜されたものでないことは、わざわざことわって置くにも及ぶまい。

此(かく)の如く批評と創作とがないまぜになり、一になって

いると云うことは、批評に興味のない読者等に取って、寧ろ煩わしく感ぜられるところであろう。けれども漱石氏等の如く、多くの場合、批評の興味の取除き得られない人々に取っては、これがまた必要なる述作の形式であるかも知れぬ。

加之（のみならず）、斯うした形式の述作は、或る種類の読者にむかないと云うまでで、それ以上に格別の不都合もないようだ。

もっとも、斯うした形式の述作に於ては、その創作の部分から受ける感じと、その批評の部分から受ける感じ

とに、距りがあっては面白くない。換言すれば、それぞれの部分から促されるそれぞれの気分がぴたりと合って、何の不調和もなきことを必要とする。

漱石氏の述作には「猫」なぞの如く、十分に其調和の取れたのもあれば、「坑夫」なぞの如く、一向に其調和の取れぬのもあるかと思う。

徹頭徹尾ユウモラスなる気分で読ませる「猫」は、色々の標準から見て最も面白い述作であるのみならず、創作的部分から促される気分と、批評的部分から促される気分とに、何等の不調和がないと云う点から見ても、代表

的述作の随一たるべきものだろう。

これに引きかえて「坑夫」の場合は、其題材の性質からして、寧ろ厳粛の、沈鬱（しんうつ）の気分を促すような創作の発展になっている。少くとも大多数の人々は、あの創作の部分から、ユウモラスな感じを与えられぬ。其癖批評の部分から「猫」の揚合と同様のユウモラスな感じを強いられる。そこに堪えがたき不調和があって、作者の態度を腹立たしくさえなって来る。何よりも先ず此点から見て失敗の述作たるを免れぬ。

「坑夫」の如き場合にすらもユウモアを働かそうとする

漱石氏が、如何にユウモアの好きな人であるか、如何にユウモアに富んだ人であるかは想見するに難くない。

総じて氏の小説は、先ず Komik（滑稽）に近いほどの Lustiger Humor（快的ユウモア）に依って、陽気な、浮々とした根調を作られている。その Lustiger Humor をなすものは、人間の言うべきことを其儘猫に言わせたり、開き直った挨拶に用うべき言葉を鼻糞をほじりながら用いさせたり、山出しのおさんどんに遊ばせの遣(つか)い所を間違えさせたりするような、語彙(ごい)の転用である。これは大袈裟に言ったのだと、わざわざことわるまでもなく、

大袈裟に言ったものとして取られるような、命題の誇張である。此転用と誇張との続出は、駄洒落の連発に一歩を進めた丈けのものである。だから「二百十日」の圭さん碌(ろく)さんなぞが、「膝栗毛」の弥次郎兵衛氏喜多八氏を聯想させるのも、決して偶然の事でない。又其一篇の結末へ来て、

「言語道断だ」

「そんなものを成功させたら、社会は滅茶苦茶だ。おいそうだろう」

「社会は滅茶苦茶だ」

「我々が世の中に生活している第一の目的は、こう云う文明の怪獣を打つ金も力もない、平民に幾分でも安慰を与えるのにあるだろう」
「ある。うん。あるよ」
「あると思うなら、僕と一所にやれ」
「うん。やる」
「屹度やるだろうね。いいか」
「屹度やる」
「そこで兎も角も阿蘇へ上ろう」
「うん、兎も角も阿蘇へ上るがよかろう」

二人の頭の上では二百十日の阿蘇が轟々と百年の不平を限りなき碧空（へきくう）に吐き出している。

とあるのが、落（おち）のない落語を聞かされたような感じになるのも、決して偶然の事でない。作家としての漱石氏の態度を、不真面目であるとか、ふざけているとか言うもののあるのは、主として此 Lustiger Humor を用い過ぎるからのことだと思う。

しかし漱石氏には、Lustiger Humor の外に、今少し意味のある Sympathetischer Humar（同情的ユウモア）がある。イングリシュ・ユウモアが少からずある。

氏がまだ帝国大学に講義をしていた頃の事であった。其講義中いつも懐手(ふところで)をしている学生があった。氏は遂に其学生の傍へやって来て、「手を御出しなさい」と注意した。けれども其学生は、一寸其顔を赤くしたばかりで、口もきかず、手も出さぬ。氏が重ねて、「手を御出しなさい」と言ったけれども、彼は依然として手を出さなかった。其晩其学生の友人が来ての話によると、右の学生は子供の時分、砲丸を弄(いじ)るか何かして、其片腕をなくしていたのである。それを聞いて思遣りのある、ディリカシイのある氏は何と言ったか。

無い袖は振られないと云うけども、僕なんざ随分無い智慧(ちえ)を絞って講義をしているぜ。〇〇君だって、たまには、無い腕位出して呉れてもよさそうなものだになあ。

これは唯(た)だの一例に過ぎない。

氏の如きは厳密に、英語に所謂ユウモリストである。ディクンズや、エリオットや、ドオデエなどにあるような温かなユウモアが、創作と云わず、批評と云わず、氏の一切の述作を貫いている。その常に、大人が子供と遊んでいるような、見下しながらも思遣ると云うような態度を、非常に面白いと思う人々もあり、稍(や)や慊(あきた)らない

と思う人々もある。

漱石氏のユウモアを慊らなく思うのは、それにSatiristisch（諷刺、皮肉）の味が少いからである。スイフトやハイネのような、悲観的な皮肉がないからである。

更に又、漱石氏のユウモアを慊らなく思うのは、Verzweifelter Humor（絶望的ユウモア）がないからである。断末魔に自分で自分を嘲笑するような、気味の悪いGalgenhumor（絞首台上のユウモア）がないからである。而(しか)して此気味の悪いGalgenhumorが、輓近(ばんきん)文学の所謂厳粛なる傾向に、大切なる一要素をなしているのは云う

までもない事だ。

「猫」の出た当時、東京朝日の「月曜文壇」で、グリ・マルキンと云う人が、

「猫」は決してユウモリストの作でない、寧ろサティリストの作である。更に進んで云えばスケプティックの作である。言い得べくんば深刻悲痛なるユウモアである。

と言った。グリ・マルキンは長谷川二葉亭氏の匿名であったときく。二葉亭氏であって見れば面白い。此批評は漱石氏よりも、むしろ二葉亭氏自らを批評したものであ

る。少くとも、氏自らの作品の上に期するところを知らず知らず述べたるものではあるまいか。

一体にユウモリストは Philosopher（哲学者）であって、Philosophize（哲学を講ずる）するものだ。漱石氏も亦 Philosopher であって、philosophize する。

けれども厳密に云えば、Philosopher の立場にいるよりも、Scientist（科学者）の立場にいる人である。philosophize するよりも、より多く moralize（道徳を説く）する人である。Scientist の立場にいて moralize する

人のユウモアは、俗耳に入り易きユウモアであると共に、深刻を欠き易きユウモアたるを免れぬ。

しかし漱石氏のユウモアは、深刻を以て許されないまでも、非常に上品なるものである。仏蘭西のある批評家が、シェキスピアの滑稽をモリエルのそれに比して野鄙（やひ）だと言った其意味合で、甚だ都雅なるものである。あれ丈け上品なる、あれ丈け都雅なるユウモアは、在来の日本文学なぞに見出されないのは勿論のこと、これからさきにも、たやすく獲らるべきものではあるまいと思う。

漱石氏の作品に於て著しき特色をなすものとしては、ユウモアの傍にイマジネエションがある。これと云って例証を挙げるのも困難ながら、今日の爾余(じょ)の作家等に比較して、随分イマジネエションの豊かな人であると云う丈けは、大抵の人が承認していることだろう。

漱石氏を何よりも先ずユウモアに富んだ、イマジネエションの豊かなる人として見るときは、やがて氏が、ディオニゾス風の芸術家であるよりも、アポロン風の芸術家であることに想到する。

アポロン風の芸術家であるからは、その芸術の、専(もっぱ)

ら「描」こうとするに腐心して、殆んどまた「歌」おうとするに念なきも、自（おのずか）らなる事だと思う。従って氏が鑑賞の際、「歌」おうとする芸術に対して、「描」こうとする芸術の偏重せられると云うのも亦怪むに足らない事だと思う。

漱石氏の作品に於て著しき特色をなすものは、ユウモアとイマジネェションとの傍に、今一つ官能を数えることが出来る。

漱石氏の官能は都会人の官能である。二三世紀かかっ

て研きをかけた江戸児の鋭敏なる官能である。

江戸児の鋭敏なる官能は、衣食住の材料に対して、一寸おつだとか、なかなか酒落れてるとか、全(まる)で渋いとか云うような、いろいろの評価を案出し、又其様式に関して、こうするものだ、ああするものだと云うような、さまざまの軌範を工夫して、贅沢なるEpicurean（享楽主義者）を作り、閑(ひま)の多い通人を拵えた。漱石氏が亦、余程の通人でありEpicureanであることは、其作品の一つ一つに証明されている。

漱石氏から少しばかりユウモアを取去って、それ丈けパッションを加えれば、ほぼ鏡花氏に近いものが出来上る。

漱石氏の鏡花氏と共通するところに、二人の作家の浪漫主義が根差を置く。固より幹となり、枝となり、作品の花と開いては、色もちがい、匂もちがう。

鏡花氏の浪漫主義は、艶(なまめ)かしき夜の燈(ともしび)の如く水の面に映り、美しき鬼火の如く地の上を這い、凄(すさま)じき烽火(のろし)の如く燃えあがる。火なるが故(ゆえ)に時ありては人の心に焔(ほのお)を分つ。

漱石氏の浪漫主義は、虹の如く華かにかかり、星の如く高らかに輝く。しかも常に冷かである。「倫敦塔」や「幻影の盾」や、「薤露行（かいろこう）」や、「草枕」や、「夢十夜」や、凡べて皆、冷かにかかる虹である。冷かに輝く星である。聊かの熱もない。

ブランデスはアナトオル・フランスを批評して、彼は感情よりも、より多くの観念を有つ。と言い、

He lacks passions, and he is never wanton, his eroticism

is only Epicureanism.

There is sensuality in his writing, and there is intellectuality—a good deal of the former, an over-powering amount of the latter.

He is taken all in all more the artistic and philosophic than the creative author.

と言った、此批評はそのまま移して、漱石氏の場合に適用することが出来ると思う。

もっとも漱石氏には、アナトオル・フランスに見るような、命懸けのアイロニイが見当らぬ。フランスの如き

ニヒリストでないからである。ニヒリズムの洗礼を受けたことがないからである。アナトオル・フランスの激烈なるソオシアリズムは、云うまでもなく其ニヒリズムから出て来たものだ。

若し漱石氏にニヒリストらしい口吻(こうふん)があったとすれば、所謂言葉の戯(たわむれ)である。談理の上に不都合な世界であると言っても、つくづく堪えがたき世界であると云う感情の充実がない。其充実したる感情を超越するに至ったと云うわけでもない。安易なる楽観主義者である。

安易なる楽観主義者は、如何なる腫物(はれもの)でも、膏薬(こうやく)を張

ってなおすことが出来ると思う。新しき腫物に対しては、新しき膏薬を工夫して行きさえすれば済むものと思う。

仏典なぞは頭の片隅へ這入り込んでいる丈けだろう。腸の中までしみ込んでいるのは、どうしても儒教のようである。新しい考と云えば、プラグマティズムのようなものが好(よろこ)ばれるのを見ても、成程とうなづかれるのである。

ところが、トルストイやニイチェに診断させると、今の社会は、人類は、到底膏薬位では間に合わないような、恐しい腫物をやんでいる。そのままにして置けば命がな

い。だから思い切って、手を切らなければならぬ。足を断たなければならぬ。切断した結果が間違って、一命にかかわるようなことがないとも限らぬ。兎に角膏薬張をしては済まされぬ。決然として外科的の手術を施さないではいられないのである。

しかも然(そ)うした荒療治は、安易なる楽観主義者から言わせると、全く無用のものであり、甚だ有害のものである、危険極まる考である。

漱石氏の見たるトルストイやニイチェ等は、ソクラテエスの眼に映じたる、軽佻(けいちょう)なる当年のソフィストの徒

に過ぎぬ。

地に泰平を出(いだ)さんために我来れりと思うなかれ。泰平を出さんとに非(あら)ず刃(やいば)を出さん為めに来れり。

と云ったナザレ人耶蘇(やそ)の如きも、若し氏と時代を同じうしたならば、氏からして所謂 Socratic Humor の的にされたかも分らない。

しかし、ソクラテエスは遂に毒盃を仰いで死んだ。矢張り危険なる考を抱いていたものに違いない。

馬琴の勧善懲悪は徳川政府の為めにも、馬琴自らの為

めにも、まことに安全なるアイディアリズムであった。

これに反して、幕末志士の尊王論は、教育勅語拝誦（はいしょう）以来の忠君愛国主義なぞと違い、其当時の社会の制度並びに秩序の為めにも、志士自らの為めにも、極めて危険なるアイディアリズムであった。

漱石氏の世界観人生観は、幕末志士の尊王論の如く危険なるアイディアリズムでなく、馬琴の勧善懲悪の如く安全なるアイディアリズムである。

馬琴と云い勧善懲悪と云えば、漱石氏の作品には可なり猛烈なる性格の理想化があるようだ。「虞美人草」なぞ

に至っては、善玉悪玉の差別さえはっきりとついている。

一方は小夜子（さよこ）や、小夜子の父や、宗近（むねちか）や、宗近の父や宗近の妹糸子や、甲野は、貞淑である、温良である、真摯（しんし）である。聡明である、何等の心得違いの事をせぬ。悉く皆善玉である。これに対して一方の小野や、藤尾の母は、浮薄である、驕慢（きょうまん）である、卑劣である。不都合千万なる考を有っていた。悉く皆悪玉である。

善玉悪玉を拵えるほどならば、善人が栄えて悪人が亡ぶと云う、めでたしめでたしがなければならぬ。「虞美人草」の大団円には少くとも Poetische Gerechtigkeit が

行われていた。

氏は又「文芸の哲学的基礎」に於て、モオパッサンの「頸飾（くびかざり）」の筋を述べ、そのあとで、

よくせきの場合だから細君が虚栄心を折って、田舎育ちの山出し女とまで成り下がって、何年の間か苦心の末、身につり合わぬ借金を綺麗に返したのは立派な心掛で、立派な行動であるからして、もしモオパッサン氏に一点の道義的同情があるならば、少くとも此細君の心行きを活（い）かしてやらなければ済まない訳でありましょう。所が奥さんの折角の丹精が一向活きて居りま

せん。

と言って、練物（ねりもの）の金剛石にだまされた気の毒な細君の為めに、作者の不人情を罵っている。作品の中で善人を栄えさせないものは、道義心に乏しいものときめているのである。

漱石氏の述作が読者の上に、「八犬伝」の如き感化を被らすことはあるだろう。尊王論の如き影響を及ぼすかどうかは分らない。現在の風教を維持するほどに将来の道徳に貢献することは恐らくあるまい。

漱石氏は屢々新人の附焼刃(つけやきば)を笑って、希(まれ)に旧人の矯(きょう)飾(しょく)を咎(とが)める。習俗と歩調の合い易い人である。其思想には概念の改造がない。所謂価値の顚倒がない。

四十一年九月号の「文章世界」には氏が其青年の時代に於て、将来の方針を立てようとしたときに、

建築ならば衣食住の一で、世の中になくて叶わぬのみか、同時に立派な美術である、趣味があると共に必要なものである。で、私はいよいよそれにしようと決めた。

とある。其「趣味」あるものと云い、「必要」なるもの

と云う概念が、今も尚お昔と変らない。不必要なる「趣味」があり、無趣味なる「必要」があり得るものと思われている。

三十九年十一月号の同じく「文章世界」には、普通に云う小説、即ち人生の真相を味わせるものも結構ではあるが、同時にまた、人生の苦を忘れて、慰藉(いしゃ)するという意味の小説も存在していいと思う。

とある。「人生の真相を味わせ」ないで、ただ「慰藉」するような文学の慰藉が、低級の慰藉であることに、未だ想到されないのである。

氏は又、「文芸の哲学的基礎」に於て、真、善、美、壮と云う四種の理想を立て、それが互に平等の権利を有っていて、相冒すべからざる標準であると言った。而して其相冒すべからざる標準の相冒したる例として、モオパッサンやゾラの作を挙げ、イブセンの「ヘッダ・ガブラア」を挙げシェキスピアの「オセロ」を挙げた。

私共を以て見れば、所謂真、善、美、壮が相冒すと云うのは、旧(ふる)き真、善、美、壮と、新しき真、善、美、壮との衝突に過ぎない。旧き真、善、美、壮が互に相冒さざるを得るごとく、新しき真、善、美、壮も亦互に相冒

さざるを得るものである。かりにフォルケルトのMenschlich-bedeutungsvolle（人間的に意義あるもの）を用いて言えば、旧き真、善、美、壮が旧きMenschlich-bedeutungsvolleによって統一されたる如く、新しき真、善、美、壮も亦新しきMenschlich-bedeutungsvolleによって統一されている。矛盾は常に新旧の間に存する。

同じくまた、「文芸の哲学的基礎」の中に、

現代の世紀ヒロイズムの欠乏した世はなく、又現代の文学程ヒロイズムを発揚しない文学は少かろうと思います。現代の世に荘厳の感を起す悲劇は一つも出ない

のでも分ります。

と言っている漱石氏は、「文芸とヒロイック」なる論文の中に、

余は近時潜航艇中に死せる佐久間艇長の遺書を読んで、此ヒロイックなる文学の我等と時を同じくする日本の軍人によって、器械的の社会の中に赫(かく)として一時に燃焼せられたるを喜ぶものである。云々

と言っている。イブセンの「ブラント」や、「民衆の敵」にも、ニイチェの「ツアラトゥストラ」にも見出されなかったほどの貴いヒロイズムの実例が、佐久間氏の遺書

に於て見出されたと云うのは面白い。

重ねて言う。漱石氏の思想には概念の改造がない。所謂価値の顚倒がない。習俗と歩調の合い易い人である。

習俗と歩調の合い易い人は、所謂国民性なるものを尊重する上にも、かなりに習俗と相容(あいい)れる。

二千年や三千年の歴史位では、到底解決することの出来ないような、根本的の大問題に対するも、氏は尚お自分が日本人であって、西洋人でないと云うことを忘れずに説く。

自然派だとか浪漫派だとか云って概括されるのを、個性の没却として憤る氏にしては、此(かく)の如く、日本人としての概括に甘ずると云うことが、一の矛盾ではないかと思う。

しかし所謂和魂洋才の人にも其大和魂を傷けない範囲に於て、思想の変遷があることは認めなければならぬ。

例えば、「文芸の哲学的基礎」（四十年四月頃）なぞで、現代文芸の根本的傾向を、真向から罵倒し去った漱石氏が、「創作家の態度」（四十一年二月）へ来ると、

大分舌鋒(ぜつぽう)を和らげて、所謂自然派なるものを攻撃するよりも、所謂非自然派の立脚地を防衛することに努めるようになっている。其中には、

両種の文学の特性は以上の如くであります。以上の如くでありますから、双方共大切なものであります。決して一方ばかりあれば他方は文壇から駆逐してもよい杯(など)と云われるような根底の浅いものではありません。又名前こそ両種でありますから、自然派と浪漫派と対立させて、塁を堅うして、濠を深うして睨み合ってるように考えられますが、其実敵対することの出来るの

は名前丈けで、内容は双方共に往ったり来たり、大分入乱れて居ります。のみならずあるものは見方読方では、どっちへでも編入の出来るものも生ずる筈であります。

なぞとも言っている。更に其後の「イズムの功過」と云う論文には、

自然主義なるものが起って既に五六年になる。これを口にする人は皆それぞれの根拠あっての事と思う。わが知る限りに於ては、又わが了解し得たる限りに於ては（了解し得ざる論議は暫く措（お）いて）、必ずしも非難

すべき点ばかりはない。云々

と言って、所謂自然主義の相対的価値を十分に承認し、自然主義者はこれを永久の真理の如く言いなして吾人生活の全面に渉って強(し)いんとしつつある。

自然主義者にして今少し手強(てごわ)く、又今少し根気よく猛進したなら、自ら覆(くつがえ)るの未来を早めつつあることに気が附くだろう。人生の全局面を蔽う大輪廓を描いて、未来を其中に追い込もうとするよりも、茫漠たる輪廓中の一小片を堅固に把持して、其処に自然主義の恒久を認識してもらう方が、彼等の為めに得策ではなかろ

うかと思う。

と言って、単に所謂自然主義者の偏狭にイズムを固守するの態度を笑っている。イズムを固守するの態度は笑われているが、自己の趣味を以て、他人の上に強いんとする者の態度が、必ずしも斥けられてないことは、「鑑賞の統一と独立」の中に、

各自の舌は他の奪いがたき独立した感覚を各自に鳴らす自由を有っているに相違ない。けれども各自は遂に、各自勝手に終るべきものであろうか。己れの文芸が己れ丈けの文芸で、遂に天下のものとはなり得ぬであろ

うか。それでは情けない。心細い。散り散りばらばらである。何とかして各自の舌の底に一味の連絡をつけたい。そうして少しでも統一の感を得て落付きたい。

と言い、

一方に於て個人の趣味の独立を説く余は、近来一方に於てどうしても此統一感を駆逐することが出来なくなったのである。

と言われているのに徴して、又「好悪と優劣」の中に、

好悪を以て満足の出来ぬほど主観が強烈に働くとき、それを客観化して優劣となし、其処に趣味の統一を要

求して始めて落付くのは、単に自我を吹聴するばかりでない。わが主観に対する同情を天下に求むる自然の声であると提唱したいのである。

と言われているのに徴しても明かではないか。のみならず、氏の所謂統一感を押しすすめて行くならば、一の流派が、他の流派の一体の傾向を排除しようとすることも、強(あなが)ち理由なきものとは見られなくなって来るではないか。精しくは、イズムの名を以て争わず、カノン（法規）を提(ひつさ)げて立たざる限り、おおよその趣味を同じゅうする一の団衆が、他の団衆の大体の趣味を閑却し、蔑視し、

嫌悪するに至ると云うのも、強ち不自然なることでなく、亦必ずしも咎むべきことではなくなって来るではないか。

思想の変遷は、作品の上にも見えている。

漱石氏は自然派勃興の初に於て、文壇の新機運を代表すると云う意味で、独歩氏藤村氏等と並称せられたが、其新機運なるものの発展し来るにつれて、いつとは知らず閑却冷遇を受けるようになって来た。

されば「草枕」に於ける非人情主義の提唱は、一面当

時の論客の、触れる触れぬの詮議に対する、反撥的の態度であったとも解釈することが出来る。

引続き「虞美人草」は、「文芸の哲学的基礎」に於ける現代文芸の弾劾と相応じて、氏の所謂真、善、美、壮の相冒さざるものを書こうと試みた。とり分け真の善、美を冒さざるものを書こうと試みた、一篇の眼目となるところには道学的の傾向が置かれていた。

「草合（くさあわせ）」として一に纏められたる「坑夫」並びに「野分」には、半ば非人情主義の傾向があり、半ば道学的の傾向があるけれど、「草枕」に於ける如く「虞美人草」

に於ける如く鮮かなるものでない。一方に於て、「創作家の態度」を論ぜられた時分の作であることに思合せて、深長の意味があるではないか。

「三四郎」まで来ると、いよいよ非人情主義の傾向も少く、道学的の傾向も少くなった。

最近の作、「それから」と「門」とに至っては、殆んど自然派の作品と撰ばない。ただに非人情でないのみならず、むしろ大に人間臭く書こうとしている。ただに道学的でないのみならず、むしろ習俗の芸術観から見ては避けなければならないような方面に、忌憚(きたん)なき筆を着け

ている。

此(かく)の如き思想の変遷は、固より賀すべき事である。ただそれが、主として芸術観上の変遷たるに止まって、人生観上のそれにまで及ばなかったのを、私共は稍や遺憾に思う。

此の如く変遷があり得たのは、氏自らの芸術観に何等かの問題があったからである。此の如く変遷があり得なかったのは、氏自らの人生観に何等の問題もなかったからである。安易なる楽観主義者には、和魂洋才の漱石氏

には、氏自らの人生観に於て、何等の問題らしき問題をももっていないからである。

氏自らの人生観に於て、何等の問題らしき問題をもっていない人として、しかも其人格の堅実高貴なるゼントルマンとして漱石氏を見るときは、不思議とよく三宅雪嶺氏が聯想される。

氏等の思想は、それがよしどれ丈け立派なものであるにもせよ、其人格と密接の関係を有して居らぬ。あれ位の思想は、あれ丈けの紳士的人格なきも、尚お且つ懐抱し得られるものである。それと同時に、あれ位の思想が

あったとて、あれ丈の紳士的人格を造り得べきものとも限らないのである。

トルストイや、ニイチェや、ゲエテや、ルッソオや、レオナルドオ・ダ・ヴィンチなぞの場合には、ああした人格であった故、ああした思想になったので、ああした思想が、そのまま彼等の人格であった。思想の外に人格はなく、人格の偉大はやがて思想の偉大であった。厳密に思想と云えば、斯うしたものでなければなるまい。

漱石氏の如きは、厳密に思想家を以て許されないものだろう。少くとも思想家としての偉大を認めることは出

来ぬ。

私共はただ氏の如くイマジネエションに豊かなる、官能に敏なる浪漫主義者の希(まれ)なるを思うとき、おおよそ鏡花氏に払うほどの敬意を氏に払おうとするに止まる。私共はまた、氏の如くウィット富める、別してユウモアに富める人の更に希なるを思うとき、我が国に於ける第一のユウモリストとして氏を待とうとするに止まる。最後に、私共はただ、氏の如く深遠博宏なる学問と、氏の如く堅実高貴なる人格との更に更に希なるを思うとき、氏の所に赴いて其教を仰ぎ、其徳に化せられんことを願う

に止まる。

（明治四十四年十二月）

日本文学電子図書館

夏目漱石氏を論ず

著　者：生田長江
制作者：宮澤一郎
底　本：現代日本文學大系 40
筑摩書房
昭和48年２月20日 初版第一刷発行

日本文学電子図書館